

'94—1・2

北海道民族学会通信

北海道民族学会

〒047 小樽市緑3丁目5番21号

小樽商科大学 津曲敏郎研究室気付
☎(0134)23-1101

題字：椿坂小龍(點の会所属)

編集：津曲敏郎

発行者：和田 完

印刷所：北海道機関紙印刷所

1994年度 第1回研究会発表要旨——○

(5月21日 北海道大学古河講堂)

北米におけるイヌイトおよびユピックに関する 文化人類学的研究の最近の動向と現状について

1984年から1993年にかけて

岸上 伸啓*

極北人類学における研究課題については、1977年までの研究に比べ、テーマに多様性がさらに見られるようになるとともに、親族研究など「伝統的な」社会人類学的研究が下火になり、土地権や先住民の諸権利の問題、生業を中心とする経済発展の問題、社会変動、教育、医療、社会問題の解決など応用人類学的研究の数が増加してきたといえる。また、ジェンダーの問題やエスニシティの問題など多数行われている。また、研究単位もこれまでの村落やネツリック・イヌイトやコパー・イヌイトのような地域社会集団ではなく、北西準州、ヌナビックやカナダ極北地域全体などより広い地域や行政区域が研究の単位となってきた。

筆者は、現代の極北人類学の中心課題は社会変動と生業をめぐる諸問題であると考えている。1980年代以降に出版された社会変動研究は、社会や文化の急激な変化を強調する研究と、それらの連続性を強調する2つの流れに分かれている。前者は、Klausner and Foulks(1982)や Pretes(1988)らの研究で、理論的な視点として従属理論や世界システム理論を援用している。後者は、Fienup-

Riordan(1983)や Nuttall(1991)らの研究で、社会や生業の象徴的側面に焦点を合わせた研究である。これら2つの異なる結論は、Balikci(1986)が指摘しているように、極北社会における2つの異なる現実由来のものではなく、むしろ研究者が採用している異なる理論的志向やアプローチを反映したものであると言える。

アラスカでの Langdon(1991)の研究、カナダ極北地域での Wenzel(1991)の研究やグリーンランドでの Nuttall(1992)の研究が示しているように、イヌイトやユピックは、貨幣=生業混交経済下においても生業活動を続け、この活動を通して社会関係を維持し、再生産しているのである。現在の極北先住民社会の現状と社会変動を理解するためには、所与の村落における生業活動とそれに深く係わる社会関係に注目する必要があると思う。

現在、極北人類学では、研究課題が専門化し特殊化する傾向が顕著である。これは研究が発展していることを示しているが、単なる専門化や特殊化の進展は研究対象の社会や文化の全体性の把握の欠如を招来し、「木を見て森を見ず」というこ

とに陥りかねない。文化人類学の最大の長所は、フィールドワークに基づき対象社会の生活をできるだけ全体として理解しようとするところであると思う。現在の極北人類学に欠けていることは、極北社会を取り込みつつあるより巨大な政治経済システムとの関係や影響に十分な注意を払いながらフィールドワークに基づいてイヌイトやユピ

ックの社会生活全体に関する現代民族誌を作成することであると主張したい。また、極北地域における社会変動や持続の特質や地域的多様性と類似性を把握するためには、社会や文化の変化のプロセスや現状に関して汎極北的な比較研究を行うことが必要であると思う。

1994年度 第2・3回合同研究会発表要旨——○ (12月3日 小樽商科大学大学会館)

コリヤークの音楽ークリクルをめぐってー

甲地 利恵*

この発表は文部省科学研究費助成によるコリヤークの芸能調査 (1993～、谷本一之代表) に基づく。

自分の歌を持つという習慣は広く北方諸民族の間に見られるが、コリヤークにも自分で歌を作り、その歌を自分の持ち歌とするという伝統がある。「歌」はレスナヤ方言で「クリクル」という。

クリクルはコリヤークの生活の各場面において多目的に使われる。踊りの伴奏音楽に用いられるときはヤーヤールという一面太鼓を打つ。

ヤーヤールの刻むリズムには大きく分けて2種類ある。①3つの打音がひとつのリズムモチーフを形成し歌自体の拍と一致して進行するもの、②各拍がほぼ等しい音価で連打されるが歌自体の拍とは必ずしも一致しないものである。

今回収録できた曲数から集計すると圧倒的に①類のリズムが優勢だ。だが①類のリズムで歌われる曲でも、歌い始める前段階として②類のリズムを打つ事例が半数近く見受けられる。

トナカイ・チュクチの芸能調査で収録されたドラムソングでは②類が用いられていた。またトランス状態では②類のリズムが聞かれた。周辺の民族の例ではシャーマンがタイコを打ちながらおこなう儀礼では②類が用いられる。ヤーヤールのリズムについては単なる音の現象としての側面だけ

ではなく、シャマニズム儀礼や他民族との交流関係などについても深く探っていく必要があるかと思われる。

インフォーマントにクリクルの内容を尋ねると、たいていの場合その歌が作られた時の情景の描写や自分の状況や感情、願望を表現したものであるという。歌詞のある歌の場合、一語一句がすべて歌われているわけではなく、*ajana...*、*awewe*、*ololo...*、などの意味のない囃しコトバ的なシラブルで歌が進行する。

レスナヤの53歳の男性インフォーマントは「歌に必ずしも歌詞は必要でない。歌詞のないとき、あるイメージや考えを心の中に思い浮かべて歌う。メロディーは同じだが感情が違うから内容も異なる」と語った。つまり、歌い手が歌う時点で心に描いたイメージやその歌の形成過程で描かれたイメージは、歌詞と同じくらい重要な情報源として認識されているらしい。

北方諸民族の「自作の歌」を比較考察していくうえでの問題のひとつは、こうした歌が一種の「モノ」として贈与相続の対象になるかどうか、人の所有物であり財産である歌を他人が勝手に歌っているかどうか、という点だ。

カラガでもレスナヤでも、家族以外の者がたまに聞き覚えたものを歌っても別にかまわない、特に問題はないとのことだった。しかし実際のレパートリーとしては自作の歌の他はたいい配偶者や近親者のものがあがる。つまり実際に他人の歌を歌うことは一般的ではないようである。

レスナヤでは、自分の歌を作るときに肉親の歌の一部を借用して作ることもあるとの情報を得た。また、あるインフォーマントは「一家族はみな同じ歌を歌っている」といった。

レスナヤの女性インフォーマントの歌った①自

分の歌と②母の歌と③祖母の子守歌とを聞いた限りでは、3曲に共通するモチーフが見うけられた。

もちろんこれはエティックな立場で聞いた限りで指摘できることに過ぎず、コリヤークの歌い手たちのイーミックな認識に迫るにはさらに多くのデータが必要だ。しかし少なくとも歌い手の意識において自分の歌の系譜ははっきりと認識されており、エティックにアプローチする限りにおいてそれを音の現象として聞き取ることも可能であると言えよう。またそうした共通のモチーフが、ある家族、ある家系のクリクルだと判別できる手掛かりの一つになっているのではないと思われる。

フゴッペ・手宮洞窟陰刻壁画研究の現状

大島 秀俊*

1. はじめに

名取武光はフゴッペ洞窟の壁画を縄文時代に残された「象徴主義の絵画」とした。昭和25・26年のフゴッペ洞窟の考古学的調査を契機とする。それ以前つまり慶応2年に発見された手宮洞窟については、考古学的な調査による年代学的な考察を経ないまま文字説が流布されていく。この中で鳥居龍蔵は1919年にエニセイ・オルコンの資料が手宮の陰刻に極めてよく類似するとし、この種の彫刻を大陸との間で関係づけた。年代観については現在の両洞窟に与えられている年代観とみなそれほど差はないといえ、文字説を取る以上それをより古い縄文時代の所産とすることができなかったということであろうか。絵画説を冷静な科学者の観察眼をもって論じたのは中谷治宇二郎(1935)であろう。この中谷以降、駒井和愛、護雅夫、名取武光と次々に絵画としてとらえ大陸との関係を論じていく。しかし、いずれもその起源が大陸であり、彫刻が絵画であろうという2点から踏み出すものではなかった。だが、フゴッペ洞窟の調査を境として、一步踏み込んでこの洞窟絵画を論じ

る研究者が現れた。それは峯山巖である。峯山は豊かなイマジネーションにより、ひとつひとつの像に解釈を与えていった。これはややもすればちかちかの物質研究者にとってみれば批判の対象でしかないものであったろう。しかしこの研究が、これからの北海道のペトログリフ研究の方向づけをおこなったものと確信している。

2. フゴッペ洞窟の考古学的評価

フゴッペ洞窟の発掘調査により、この洞窟が縄文時代全般の約700年間に亘り使用されていたことが判明した。洞窟に残された陰刻画については名取がその形態から分類を行い、人物像が具象的なものから抽象形へ変遷するとした形態分類図を示している。

洞窟の調査による成果は、これまで形態論的に分類されていた後北式土器がある程度層位的に時間差をもって確認されたことと、大量の骨角器が検出され、縄文時代のなかで、後北式土器文化における骨角器の在り方を示してくれた点にある。特に骨角器の在り方が、この土器文化の漁猟形態を考える上で貴重であり、鉄器が流入し、石器や

骨角器の形態にも変化が生じるといわれているこの時期の生活を推論するうえで、いっしょに出土した食物残渣の骨類、貝類などとともに貴重な資料を提供したといえる。

3. 手宮洞窟の考古学的評価

手宮洞窟の正式な調査は平成元年と2年に行われた。

調査の結果、後北C2・D式と恵山式土器がほんの数点発見された。しかしその意義は大きく、賈物説まで出たこの洞窟の壁画がほぼフゴッペ洞窟と同じ時代の所産であることが証明された。

この洞窟の発掘調査では、後北C2・D式の包含層から刻みのついた岩石が出土したことから、この洞窟に彫刻が残された時期をこの土器の年代である4世紀としている。

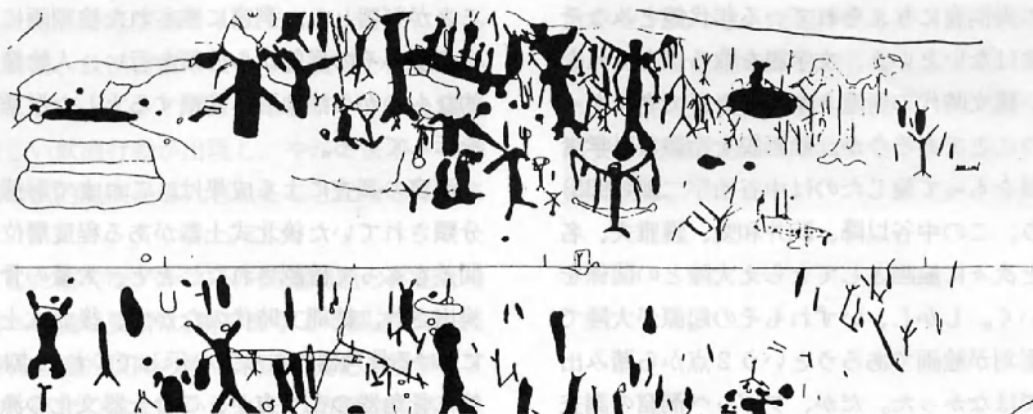
ここで重要なのは、手宮では陰刻画はこの時期に限定されるということである。このことは年代幅のあるフゴッペ洞窟と対比を行う上で極めて重要な要素といえよう。

4. 壁画としての研究の現状

早くから大陸との比較においてフゴッペ洞窟の船の絵の類例が大塚和義氏(1966)により紹介されている。これは具体例を示した点で貴重である。土谷昭重氏(1993)は「フゴッペ洞窟岩壁画一部画像の民族学及び民俗学資料による若干の考察」の中で豊富な民族・民俗例との比較を行っている。この種の比較で重要なことは実例を図示して、読

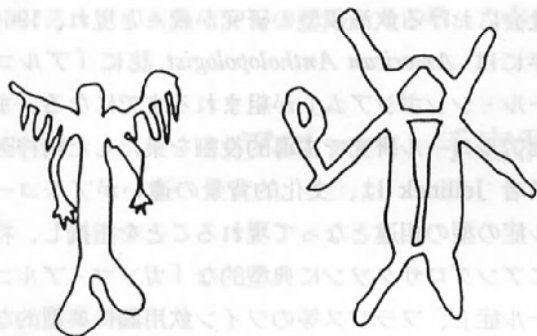
者を納得させることであろう。その意味で峯山によってチュロの木と呼ばれた絵と、高千穂神楽の比較は、今後の研究方向を示すものとする。さて、先に名取武光氏のフゴッペ・手宮洞窟陰刻画の形態分類について述べたところであるが、この図は具象的表現から抽象・簡略化された像への変遷を示す図であり、前述したように、そこには時間差が暗に介在するかのよう思われる。これは洞窟出土の土器が持つ時間幅をも考慮にいたったものと解される。しかし私は「フゴッペ洞窟および手宮洞窟壁画の一考察」(1995北海道考古学掲載予定投稿済)の中で「フゴッペ洞窟における壁画の画的構成」として「特異な姿をした像は大きさ(規模)によって孤立しており、周囲に小型の像が並ぶ。中心人物を周囲の像から際立たせて大きく描く手法は原始絵画を始め仏教画などにもみられる手法で、名取、峯山のいう系統的にデフォルメされたものではなく、画面の物語を構成する上で意図的に配された小像」という捕らえかたを試みた(第1図参照)。

また、土谷氏が示した民族例との対比という方法論を簡略に押し進めた形の調査について、第2図にフゴッペの2例の像を示した。これは手宮・フゴッペの人物像のうち、道具・服装・かぶりもの・その他について実際の民族例と比較して像を検討してみようとする試みの一部である。その中で2例だけ紹介すべくここに図示した。右の絵は



第1図 フゴッペ洞窟壁画の構図

手に何かをもっている図である。私はシャマン像が多く描かれていると仮定しているので、太鼓を捜したが見つからずそれでは他の楽器と捜したのがラトルである。特にサハリンのギリヤークが持つものに類似してはいないか(写真1参照)。左の図は背中に羽が見られる人物像である。これによく似たシャマンの衣装がある。ヤクートのシャマン衣装である(写真2参照)。今後はこのようなつき合わせ作業が、ペトログリフ研究の溝を埋めるために必要な作業のひとつと考える。



第2図 フゴッペ洞窟における特徴的な人物像

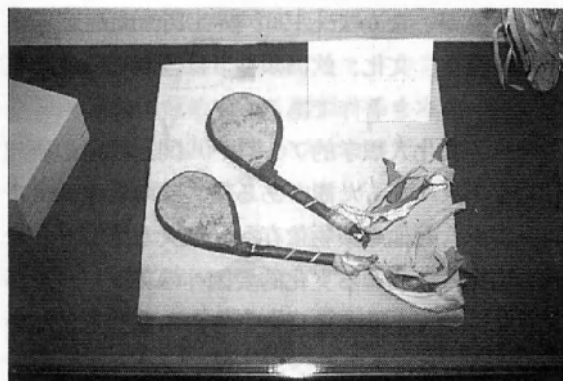


写真1 ギリヤークのラトル
(天理参考館蔵)

引用参考文献

- 鳥居 龍蔵 1919 *Inscription lapidaire d'Otaru Yezo. Etudes Archeologiques : Les Ainou des Iles Kouriles*
- 中谷治字二郎 1935 「北海道手宮洞窟の彫刻」
科学 5-6
- 護 雅夫 1951 「フゴッペ洞窟と大陸文化の
関係」民族学研究16-2
- 名取 武光 1951 「北海道フゴッペ洞窟の研究」
民族学研究16-2
- 峰山 徹 1983 『謎の刻画フゴッペ洞窟』六
興出版
- 名取 武光 他 1970 『フゴッペ洞窟』ニュー
サイエンス社
- 大塚 和義 1966 「刻みつけられた船」歴史研
究101号、人物往来社
- A. P. オクラードニコフ 1981 *Ancient Art
of the Amur Region*
- 土谷 昭重 1993 「フゴッペ洞窟壁画一部画像
の民族学及び民俗学資料による若干の考察」
北海道考古学29輯、北海道考古学会



写真2 ヤクートのシャマン服
(国立民族学博物館蔵)

文化人類学におけるアルコール関連問題の研究

和田 完*

我が国においてアルコール関連問題が文化人類学の対象として取り上げられることは極めて少ないが、米国では医療人類学の重要なテーマとしての地位を占めてきた。本論では、文化人類学におけるアルコール関連問題の研究の背景と現状について概観する。

欧米におけるアルコール問題は多量の蒸溜酒の使用と深く関わっている。とりわけ三角貿易の結果、新大陸からヨーロッパへ流入した膨大なラム酒は「悪魔のラム」として猛威をふるったのである。また、英蘭戦争後兵士が持ち帰ったジンハロンドンの下層階級に広まり、18世紀の初頭には Hogarth の戯画「ジン小路」に描かれたような惨状をもたらした。更に、19世紀初頭にはアイルランド人 Coffey が連続蒸溜器を発明すると、高濃度の蒸溜酒の大量生産も可能となり、アブサン、ウオトカ、アクワビット、ライウイスキ等が欧米諸国に普及した。かくして、1800年頃より各種の禁酒運動が始まり、遂に米国では1919年の禁酒法の制定に至ったのは周知の事実である。一方、北米ではインディアン居留地における酒害が問題となっていた。もともと開拓時代から毛皮商人等がインディアンリカーとかインディアンウイスキーと呼ばれた粗悪な蒸溜酒をインディアン社会に持ち込んだ結果、飲酒習慣のなかった彼等の間にいわゆる「インディアン・ドリンキング」という爆発的で激しい飲酒行動が出現し、やがて彼等への酒類販売の法的規制が導入されることになるのである。

こうした重大なアルコール関連問題の存在とその対策への強い要請は、精神医学との関連の深く、かつ功利主義的傾向の強い米国の文化人類学にアルコール研究の道を開いた。その初期の画期的な研究として、第一に Horton が「アルコール研

究季刊雑誌」に発表した「未開社会におけるアルコールの諸機能」(1943年)を挙げなければならない。この論文は心理学者 Hull 一派の学習理論に基づくもので、エタノールの不安低減機能に着目し、不安の強い社会に高いアルコール使用が出現すると結論している。以後無文字民族や後進的社会における飲酒類型の研究が続々と現れ、1964年には *American Anthropologist* 誌に「アルコール・シンポジウム」が組まれるまでになる。またアルコール研究で主導的役割を果たした精神医学者 Jellinek は、文化的背景の違いがアルコール症の型の相違となって現れることを指摘し、特にアングロサクソンに典型的な「ガンマ・アルコール症」、フランス等のワイン飲用圏に典型的な「デルタ・アルコール症」、フィンランド等に頻出する周期的な渴酒症状を示す「イプシロン・アルコール症」といった分類を行っている。彼の研究に相前後して米国人の民族的出自の違いとアルコール症の頻度や型の相違を指摘する研究が輩出しているが、なかでも1962年に Pittman が編集した「社会、文化、飲酒類型」は当時の研究の集大成というべき著作である。

今日、文化人類学的アルコール関連問題の研究はやや下火になった観があるが、その対象はアルコールを含む他の薬物依存へと拡大しており、それらの発生に関わる文化的要因へのアプローチが重要な問題であることにいさかも変わりはないのである。

●書評●

○岡田 宏明『北の文化誌—雪氷圏に生きる人々』

アカデミア出版会、京都、1994年、221頁

○山田 孝子『アイヌの世界観—「ことば」から読む自然と宇宙』

(講談社選書メチエ24) 講談社、東京、1994年、278頁

1994年度中に出版された道民族学会員の著書ということで岡田宏明氏の『北の文化誌』と山田孝子氏の『アイヌの世界観』の2冊を取りあげる。専攻の異なる者が書評するのであるから細部にわたり論戦を挑むような書評ではなく、紹介を兼ねた書評と言うことになる。

この2冊を取りあげた理由は、私が同じ北方地域の言語の研究者ということもあるが、他につぎのような理由にもよる。

1993年の「国際先住民年」に引き続き、1994年からは「世界の先住民の国際10年」が国連により提唱され、ここ数年、北海道では、その地理的位置のゆえか、特に北方諸民族の言語・文化・歴史への関心が例年になく高まりを見せている。

ユネスコ会議においては、「言語の危機」に対する対策が協議され、既に東京大学に「言語の危機」に関する情報センターが設けられ、活動を開始した。2月20日付け北海道新聞朝刊にAP=共同発外電として、米科学振興協会会議においてアラスカ大学のマイケル・クラウスらが行った研究発表の記事が載っている。その記事によると、先史時代の人類の言語数は、約1万から1万5千だったと推定されるが、現在使用されている言語数は、約6千であり、紀元2100年までに生き残る言語の数は約6百と予測し、より「小さな」言語を守る必要性を強調している。

このような言語の危機が文化や民族の危機につながる可能性を多くの人が危惧し、それによって人類のもつ多様性そのものが失われるのではとい

大島 稔*

う危機感を抱くようになっている。書評にとりあげた二書に盛り込まれたそれぞれの研究成果にも、北方という地域に限定はあるものの、近年のこのような少数民族の言語・文化に対する危機感と共鳴する内容が含まれている。

岡田宏明氏は、2年前の1992年に同じアカデミア出版会から岡田淳子氏との共編著『北の人類学』を出版した。2冊を書棚に並べると、題名といい装丁といい姉妹編とも思える。しかし、本の構成は、『北の人類学』は、12名の研究者による書き下ろしの論文集であるのに対して、今回の『北の文化誌』は、岡田宏明氏の単著であり、1986年から1992年までの間に雑誌等に発表されたものを広く利用できる単行本にまとめたものである。

同書については、すでに2月19日の北海道新聞朝刊書評欄「ほん」に大林太良氏による書評があるので、それと重複しない形で極力異なる視点から評したいと思う。

各章の内容は、先史モンゴロイドの新大陸への移住、海洋適応、環境と生態、文化史、民族接触、文化変容など多岐にわたる章を「環極北圏の民族と文化」と「環極北圏の環境と生態」の2部構成としている。この構成は、1979年に出版された著書のタイトル『文化と環境』（北海道大学図書刊行会）にその典型が見られるが、人類学において考古学と文化人類学を統合し、環境・生態と文化との関係の解明を主テーマとした著者のこれまでの研究姿勢の現れと言ってよいであろう。

主として参照される民族例は、専門のエスキモ

一の他にアサバスカとニブフ民族であるが、広く北方民族との比較という視点で取り扱われることが多い。特にニブフについてはこれまでに著者がまとまっては、扱ってなかった民族例のように記憶している。執筆時以降にシュテルンベルクの弟子であるクレイノヴィチの民族誌、柁本哲訳『サハリン・アムール民族誌—ニブフ族の生活と世界観』（法政大学出版局、東京、1993年）が出版されている。著者に扱ってもらいたかった民族誌である。

もう一つの特徴は、いくつかの章で、北方圏の住民との個人的な出会いから始まり、民族と文化への問題意識、研究をリードし、シンポジウムを組織してきた過程について触れる点である。研究者の個人史はなかなか自ら語られない場合が多いのだが、研究の舞台裏を明かしているようでもあり、北海道を中心とした北方研究の流れと国際的な学術交流の歴史が見えてくる所も本書の魅力である。

山田孝子氏の『アイヌの世界観』は、氏が北海道に住み出してから始まる約10年間のアイヌ研究の成果をまとめたものである。氏は、それまで沖縄の八重山、ミクロネシア、アフリカ、西チベットなどの広い地域にわたり、エスノサイエンスに関する研究を一貫して行ってきた。アイヌ民族について始めたエスノサイエンスの最初の研究テーマは、「植物分類体系」であった。植物も「カムイ」であることの意味をさぐる中で研究は深まり、「動物分類」、「ジェンダー論」、そして「信仰体系」と「世界認識（世界観）」まで広がりを見せたといえる。

たしかに著者もあとがきで指摘しているようにアイヌの信仰に関して、分析的な「カムイ」研究、あるいは体系的な「アイヌの宗教と信仰」研究が欠けていたといわざるを得ない。

氏のとった方法論、認識人類学的方法、（氏の言葉によると）「ことば」の分析から、「ことば」の背後にある、隠れた世界の認識の仕方を読

み解く」方法が、特にアイヌ語の場合に威力を発揮する条件があったと言える。それは、アイヌ語は、雅語と日常語の区別があり、雅語による口頭伝承資料が豊かであるからと言える。

アイヌの宇宙観に関して、山田孝子氏の研究成果を大筋で認めるもののさらに考えたい点がある。それは、ポッナモシリ＝カムイモシリとしている点である。最近の文献の、藤村久和『アイヌ、神々と生きる人々』（福武書店、東京、1985）と松居友・小田イト『火の神の懷にて—ある古老が語ったアイヌのコスモロジー』（JICC出版局、1993）でも、すっきりした説明がなく、不明として残された課題と言える。

渡辺仁・大島稔・切替英雄・佐藤知己『平成2年度アイヌ民俗文化財報告書：アイヌ民俗調査X：千歳』（北海道教育委員会）の中の「6-5-7 死生観」項に報告されているナ イマカケノ ポッナシリ「もっと奥のあの世・下界」をどう位置づけるかも課題である（報告書11-1-2には、あの世を描写した「アフンボルを通してあの世に行って来た人の話」も収められている）。松居友氏の前掲書に指摘されていることであるが、あの世の人は、もっと奥の世へ行き、そこから神の国へ行くという話、あの世からこの世に生まれ変わるという話を総合すると、「この世」と「あの世」の逆転の世界がさらに逆転した「もっと奥の世界」が、「神の国」とイコールであるという考えが成り立たないのであろうか。著者に一考願いたい点である。